

2. 寄稿：幸徳秋水は「命の恩人」？

作家・文筆家 田尻成美

実家の父は、明治 35 年山形県酒田市の大きな庄屋の分家に生まれた。本家は農家でありながら参勤交代の際に大名一行が宿泊する本陣でもあり、神社の氏子総代も務める格式の高い家であった。

そんな名家の出でありながら、若き日の父は社会思想に傾倒し、特に幸徳秋水のアーキズムに惹かれていった。19歳で上京後、昭和4年27歳で結婚し、翌年には長男、3年後には次男も生まれ、平和な家庭を築いていたが、長男が小学校に入る頃、思わぬ出来事が一家を襲った。



父の祖父に当たる人物のエピソードが掲載された「庄内日報」の記事

<https://www.shonai-nippo.co.jp/square/feature/exploit/exp270.html>

ある初冬の早朝、激しく玄関の戸を叩く音で一家は目を覚ました。母が戸を開けると、そこに特別高等警察官（略して特高）が数名険しい顔をして立っていたのである。アーキズム研究会のメンバーの手帳に父の名前が載っていたことから危険人物と疑われ、家宅捜査が行われたのだ。

特高たちは、机やタンスの引き出し、押し入れの中、鴨居の後ろ、台所の床下収納まで隈なく開けては何かを取り出し、押収していく。父は連行され、騒ぎで目覚めた子供たちはおびえて泣きだす始末。当時 20 代半ばだった母は、しかし、七輪で湯を沸かし、何と特高たちにお茶を振舞い始めたのである。

「朝からお役目ご苦労様でございます」と、湯気の立つ茶碗を差し出す母に、特高たちは驚いたように顔を見合わせた。上官らしき人が「いや～、これはどうも。寒いので助かります」と、茶碗に手を出すと、部下達も手を止めて熱いお茶をすすり出した。

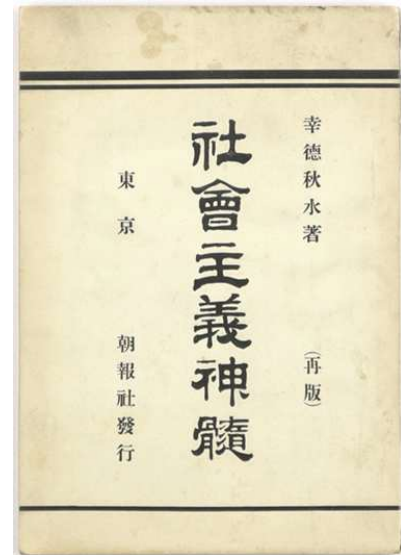
一方、捕まった父は厳しい取り調べを受けたが、その時取調官にこう言われたと、後年父が語ってくれた。「君はいい細君を持っているなあ。今まで何件も家宅捜査に行ったが、あんなふうにお茶を出されたのは始めてだ。夫思いで、肚の座った細君だ。大事にするんだぞ。」特高に好印象だった母のお陰か、父は 2 か月ほどで出所し、無事仕事に復帰できたのであった。

だが、こんな大変な経験をしたにも関わらず、父のアナーキズムへの傾倒は変わることはなかったようだ。

やがて戦争が始まり、徴兵された父は砲兵として配属された。ある晩、父は憲兵と伍長に起こされ、兵舎の外に連れ出された。憲兵は憮然とした表情で父を睨みつけ、一方で伍長は今にも泣きそうな顔をしている。「この本に見覚えあるか」と憲兵が1冊の本を突き出した。月明りを頼りに本の表紙を見ると、「幸徳秋水著 社会主義神髓」と書いてあるではないか。

これは父が実家にいる頃読んでいた本だ。なぜそれが今ここに？父は訳が分からず黙っていると、憲兵が続けた。「これは貴様の実家からの慰問袋に入っていたものだ。帝国陸軍の軍人がこんなものを持っていることが知れたら、どうなるか分かっているか？場合によっては連隊長の首が飛ぶ。いいか、軍人が国家転覆を解く本などを読むのはもとより言語道断、所持しているだけでも懲罰ものだ。」

伍長がとうとうこらえきれずに「自分の班から反国家分子が出たとなったら、どんな責任を取られるのか」と嗚咽しはじめる。父も目の前が真っ暗になった。憲兵が口を開いた。「この本はなかったものとしてこちらで処分する。しかし貴様は危険な思想犯であるから重営倉行きだ。」



翌日から父は重営倉に収監された。営倉とは軍隊における刑務所のこと、重営倉には特に重大な罪を犯した兵士が収監される。寝具の供与はなく、食事は麦飯、湯、塩だけ。起床ラッパから消灯ラッパが鳴るまで一日中正座していなければならない厳しい懲罰であった。

まもなく父が配属されていた砲兵連隊は外地へと出兵。この部隊は、マレー、インパールを始め激戦区を歴戦したが、重営倉に収監されていた父は一度も戦場に出ることなく終戦を迎えたのであった・・・。

しかし、なぜ幸徳秋水の本が送られてきたのだろうか？父の話では「俺の本棚から何か1冊送れ」と実家に手紙を出したことがあり、それならと、実家の兄が父の愛読書を送ってきたのが真相のようだ。もしこれが他の本だったら父は重営倉に入ることもなく外地へと出兵し、場合によっては戦死していたかもしれない。そうしたら私を含め、戦後生まれの兄弟は生まれてくることはなかっただろう。

父の重営倉送りはとんだ災いだったが、そのお陰で戦場に行かずに済んだのだ。戦時下にあナーキストであったことが逆にプラスに働いたのだから、人間何が幸いするか本当に分からないものである。

補：寄稿のバックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/professional> に掲載